

「コロナ禍の心豊かな芸術体験

～子どもは小さな芸術家～

渡辺 一洋

育英大学教育学部教育学科児童教育専攻 准教授



第6回「子どもは小さな芸術家」フィナーレ (2021年2月)

1. 「子どもは小さな芸術家」について

「創造力あふれる協同作品と華やかなファッションショー」。小学生のダイナミックな芸術活動「子どもは小さな芸術家」は2021年2月で6回目の幕を開けました。このイベントは「高崎市内の小学生達に心豊かな芸術体験を贈りたい」という願いを基に、地域連携を進める新しい取り組みとして、主催者の群馬県高崎市に所在する高崎市中央公民館、講師の筆者、サポートの育英短期大学保育学科の学生有志が、三位一体となって独創的な実践を展開してきました。これまでの活動としては、高崎市内の小学校1～6年生の希望者を対象に「紙芝居」「絵本」「プラネタリウム」「大型紙彫刻」「影絵」などの作品と衣装を制作してきており、本年度は、協同絵画と参加児童の等身大人形の制作を行いました。昨年度の緊急事態宣言に伴う1年延期の再開です。

このイベントに関わるきっかけは、高崎市中央公民館主催による「育メン講座」の講師を担当していた経緯があり、2015年2月の第1回から筆者が講師を担当しています。講座当初から、異学年の子ども同士の関わりが少

ない現代社会を背景に、参加児童を異学年のグループに分け、アイデアを出し合い、一つの作品を完成させる喜びを分かち合うことを重視してきました。

また、これまでイベントには育英短期大学保育学科の学生有志が保育者力量形成の意味から関わり、参加児童の技術的な補助などで活躍しています。参加児童にとっては、お兄さんお姉さん先生としての学生と関わることから、緊張がほぐれ、安心感を与えることにもつながっています。筆者が同じ敷地内に 2018 年に開学した育英大学教育学部教育学科児童教育専攻に 2019 年 4 月に異動してからは、育英大学教育学部教育学科の学生と活動を進めています。

過去に開催した最後のフィナーレのインタビューでは、参加児童から「みんなとおわかれするのはさみしいけど、色々なものを作れて楽しかったです」「ここは、ぼくにとっては安心して制作できる場所です」などの声が聞かれました。¹⁾

2. 開催実践の内容と経過

2021 年の「子どもは小さな芸術家」の再開催では前年予定の 34 名から 8 名（1 年生 2 人、2 年生 2 人、3 年生 1 人、4 年生 2 人、5 年生 1 人）の参加に減ってしまいましたが、感染対策をしやすく、活動しやすい利点もあることからコロナ感染予防の利点があると思われました。昨年の 2 月に中止になった時に準備していた山積みの資料を読み返してみました。開催に先立ち、去年、置き忘れた荷物をもう 1 度、準備するような不思議な感覚でしたが、準備していた頃のイメージが再び、脳裏によみがえってきました。緊急事態宣言の出たあの日、筆者は学生とナレーションのセリフや参加する児童を 5 つの色のチームに分け、春風をローラーで表現したり、等身大の人形作品の制作を行おうと考えていました。春風の吹く卒業シーズンにぴったりの作品イメージを再び思い返しました。

そして、春のあたたかい風が吹くような思いをローラー絵画の実践に込めた作品になるよう願いを込め、2021 年の感染対策をしながらの新しい生活様式に沿った実践の準備に入りました。実際の日程は 2 日間で行われ、1 日目はお弁当を持参して、10:00~15:00 まで昼休憩を挟みながら、活動を行いました。最初は、緊張した市内の異学年の子ども達が自己紹介やアイスブレイキングなどからお互いにコミュニケーションをとりながら、協同による作品や個人の制作を進めました。その際、サポート学生が制作した衣装や等身大の人形作品による作品制作の説明を行いました。

今回の実践では、最初に「ダンボールに貼った和紙に建物、虫や鳥、花や木、人、春らしいもの」について、



くじで決めた各グループに分け、クレヨンで描画しました。和紙については、日本の四季を表現することや絵具を塗った時に美しい表現になると考え、材料を選びました。次に、ローラーを用いて、「水色、緑、ピンク、オレンジ、黄色」のそれぞれの色のチームに分け、「春風」になったつもりで水彩絵具を水に溶き、少し中性洗剤を混ぜた絵具で色をつけました。和紙に表現された絵画はなんともいえないあたたかみのある作品に仕上がりました。

絵画制作の次に等身大人形制作を行いました。この制作は衣装制作のテーマに沿った作品となるため、児童のペアでロール紙に人型の描画をし、クレヨンなどの描画材で描いたり、飾りつけをするなどして完成させました。



クレヨンによる和紙への描画とローラーによる水彩絵具の着彩の様子



和紙にローラーで着彩した作品

出来上がった作品は、それぞれユニークな作品やかわいらしい作品などから細部にわたる工夫点が見られました。絵画制作が終わると、衣装作品を制作しました。自分の「将来の夢」をテーマに、電車の運転手、水族館の飼育員、動物園の飼育員、お花屋の店員、バレリーナ、YouTuber、などの作品を制作しました。ここでは、あらかじめ、カラーポリエチレン袋から好きな色を選び、テーマに沿った飾りをつけたり、オリジナルの靴を制作する児童の姿が見られました。また、事前に紙皿と工作用紙で制作していた紙の帽子の骨組みを各児童に準備し、オリ



等身大人形制作の様子



ジナルの帽子も制作してもらうことにしました。帽子制作においても衣装に沿った華やかなデザインが印象的な作品が多く見られました。

2日目は、10:00から制作作品の手直しや発表の練習を行い、11:40から発表、12:00に終了という流れで行いました。作品については、これまでは、特に低学年の児童で、ギリギリまで終了に時間のかかった場面が多かったのですが、少人数ということもあり、割とゆったりと制作を楽しんで行う児童の姿がほとんどでし



衣装制作の場面



作品展示の様子



た。また、リハーサルは、30分程度行うのですが、いつもであれば「発表直前に衣装がとれた。緊張のあまり、セリフを言う場面でセリフを忘れてしまい、サポート学生の補助が必要になった」など、バタバタとして大騒ぎな年もありましたが、この点についても、今回は少人数のため、2回のリハーサルで本番に向かうことができました。さらに、活動の全てにおいて、感染予防を意識しながら、進めていたため、実践プログラム以外の気を使うことが必要となりましたが、こちらも比較的、間隔を開けた活動や消毒をこまめにするなどのことを徹底して行うことができました。

3. 発表と鑑賞及び実践のまとめ

1日目の活動終了後に、筆者、サポート学生、公民館のスタッフで和紙にローラーで色彩をつけた絵画、等



2日目の参加児童全員による作品発表とフィナーレの様子

身大人形を展示しました。和紙に着色したあたたかい絵画作品の前に自分の夢をテーマにした等身大人形が立体的に春らしいメッセージ性のある作品として表現できました。また、参加児童が少人数だったことから、作品をゆったりと展示でき、鑑賞しやすい空間となりました。作品発表については、2日目の最後に行いました。参加児童の保護者に間隔を空けて鑑賞者となって座ってもらい、最初に2日間の活動の様子について、筆者から経過を説明するとともに、サポート学生の参考作品を通した作品コンセプトについて紹介しました。引き続き、児童の発表となり、各児童のスポットライトを浴びた素敵な作品発表となりました。そして、これまでは、発表の最終場面で卒業する6年生に代表してインタビューをしていましたが、今回は参加児童全員にインタビューをすることができました。「自分で考えて何かを作り出す体験、最後までやり遂げることができた達成感」がインタビューから聞かれ、和やかな雰囲気の中で、フィナーレを迎えることができました。

活動終了後の児童へのアンケートでは「自分が好きなように服を作れてよかった」「いろいろな材料がある中で思いきり作れました。家でも工作はするけれど、こんなにたくさんの材料で作れたのは初めてです。『工作の材料がある部屋』のようで楽しかったです。自分が作りたいと思っているものができて満足しました」「思い出に残ったことはローラーで紙いっぱい描いたこと」「服を作るのが楽しかった」「作るのは大変だったけど、帽子やバックを作って、アドバイスをもらって、カッコいい衣装ができた」という意見がありました。

また、参加児童の保護者からは「保護者が付き添わないということで初日は心配でしたが、しっかりと1日やり遂げることができ、発表会の様子も立派でした。2日間で大きく成長したような気がします」「コロナ禍で大変な中、実施していただき、ありがとうございました」「8人での活動で、例年より少人数でしたが、とてもじっくりと丁寧に先生方と関わられたようです。次年度もこのくらい(10人くらい)の開催だといいなと思います。ローラーを使っての背景作りや衣装作りでのアイデア出しなど、たっぷりの良い時間が過ぎて子どもが大満足でした」「公民館での多くの楽しい活動が開かれていることが、もっと多くの方の目に触れることができればと思います」「少人数での開催、感染対策の工夫など、ありがとうございます。本来ならば、もっと大人数で実施した方が楽しい企画だったと思います(きっと、主催してくださった皆さんも、そうしたかったと思います)手をかけて、少ない子どものために時間と労力を費やして下さりありがとうございました」などの意見がありました。

今回の実践を通して、参加児童や保護者の感想にも見られるように「ゆっくりと少人数での関わり」「少人数ならではの作品の鑑賞及び展示のしやすさ」「大がかりではない主催者、参加者双方の時間的、空間的な余裕」などが相乗効果を生み出していたと考えられます。これまでは、「大がかりで、ダイナミックで、大人数で、なるべく派手なインパクトを与える表現」などを盛り込んだエネルギッシュな計画を立ててきましたが、主催者側との振り返りの中で、今回の発表を通して、「少人数で、ゆったりとした空間でコミュニケーションが取りやすい」「目が行き届き、活動しやすく、なおかつ、参加者の満足度が高い」などのコロナ禍を通した実践の方向性を考え直すことができました。

今回の活動に至るまでの2020年2月から2021年2月までの経過の中での表現活動の不自由さ、自由さについて思考錯誤してきました。時代の大変革の中に立ち、今後の「子どもは小さな芸術家」の実践計画やコロナ禍の表現活動について、引き続き今回のアンケート結果も踏まえながら探求しつつも、新しく壮大なテーマにチャレンジしながら小学生向けの楽しい企画を考えていきたいです。

註

- 1) 2020年2月28日・朝日ぐんま『地域繚乱』(Vol.152)にて関連するコラムを掲載 (<https://www.asahigunma.com/>)